

リポート

戦中・戦後期の『静岡新聞』夕刊発行状況について

島堀 操八（2022年7月）

はじめに

静岡県立中央図書館歴史文化情報センターには明治以降、静岡県内で発行された各種新聞が保存されている。といっても原紙ではなく、マイクロフィルムからA3サイズにプリントアウトしたものを、かがり綴じし、クロス装で製本したものである。頑丈である。

頑丈であるということは重要である。A3サイズ縦綴じで、分厚いものは1冊最大7キロもある代物を、コピー機のガラス面に押しあてて左肘で押さえつけ、右手で「コピー」ボタンにタッチすると素早く、両腕に体重を移して押さえつけて、ジーッコッ。

1日150回から200回これを繰り返すと、夕刻が近づくと両手首が痛くなる重筋労働である。人間の筋肉はこれで丈夫になるが、やわな無線綴じ製本だったら、本のほうがすぐに壊れてしまう。

もとより古い紙面は文字が潰れて、どんなに拡大しても判読できないこともあるし、ピンぼけで全面ぼやぼやのページもある。創刊号から全号揃っているわけでもないし、切り取られたと思われるページも散見する。しかし原紙の2分の1という縮尺ながら、1ページ全体を一目で鳥瞰できるという便利さがある。

静岡県立中央図書館本館にはこれと同じようなプリント版が開架で公開されているが、無線綴じのため壊れている製本がかなりあり、歴史文化情報センター版の再コピーのためかどうか、文字が潰れていて読みづらいことが多い。しかも往時は後に述べるように、新聞は夕刊→朝刊が同日付でセット発行されたのに、本館の製本はわざわざ朝刊→夕刊の順で綴じられているので、事件の筋を追っていると頭のなかのストーリーが混乱する。

また本館にはマイクロフィルムリーダーの設備もあるのだが、1人当たりの利用時間に制限があり、何よりもマイクロフィルムコピー代が1枚50円と目玉が飛び出るほどに高い。1～2枚ならいいが、100枚、200枚となると個人研究者にとっては負担が大きい。研究者にたいする配慮が欠如していると思わざるをえない。

1 『静岡新聞』の創刊と夕刊の発行

1941年＝昭和16年12月1日、『静岡新聞』が創刊された（図1）。

第1面の上段、左端に当時の静岡県知事・小浜八弥氏の祝辞が載っている。

《多年の伝統と歴史とを有する 県下六新聞社が 過般国策に順応して欣然廃刊統合し、茲に静岡新聞社を開設、一躍新報国の道に邁進せんとする襟度は社会の木鐸たる新聞紙の真使命に照らし洵に欣快の至りに堪へない。》

お褒めの言葉をたまわった6新聞社は紙面の右端、題字下に列記されている。



図1 『静岡新聞』創刊号第1面

聞》

静岡県における1県1紙体制のスタートである。もとよりこのとき日本国民のだれ一人として知る由もないのだが、すでに大ニッポン帝国破滅の矢は放たれていた。この1週間後に、大日本帝国陸海軍によるマレー半島上陸作戦・真珠湾攻撃が始まる(図2)。

ここで話はわが帝国陸海軍による赫々たる戦果を追っていくのではなく、虫眼鏡で見なければ分からないような些末なことに続く。『静岡新聞』創刊号の欄外(図1-2)、いわゆる書籍でいうハシラと題字に目を凝らしていただきたい。

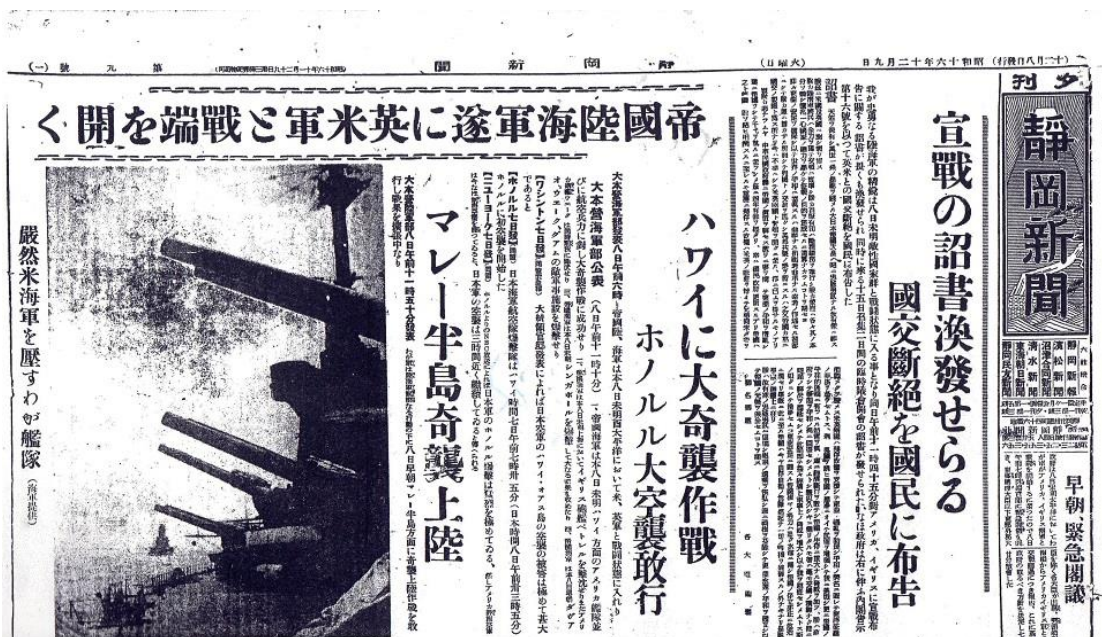


図2 真珠湾攻撃・マレー半島上陸を伝える『静岡新聞』第1面

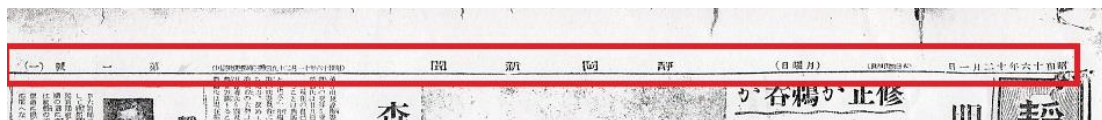


図1-2 創刊号の欄外=ハシラ部分

《(一) 第一号 (可認郵便物種第三日九十二月一十年六十和昭) 聞新岡静 (日曜月) (頁増刊朝日本) 日一月二十年六十和昭》《静岡新聞》

昭和 16 年 12 月 1 日、本日は増ページ、月曜日、『静岡新聞』、11 月 29 日に第三種郵便物として認可され、第 1 号が発行された、その第 1 面という意味である。

歴史文化情報センター蔵架の『静岡新聞』(Vol. 1 昭和 16 年 12 月、静岡県史編さん室、製作年不明)〔以下『静岡新聞・プリント製本版』(Vol. 1) というふうに表記する〕には続けて、12 月 2 日付の夕刊以下が綴じてあるので、その順番どおりに書き出してみよう(図3-1)〔以下、第一面とか第三種郵便認可年月日は略す〕。

《第一号 聞新岡静 (日曜月) (頁増刊朝日本) 日一月二十年六十和昭》《静岡新聞》

《第二号 聞新岡静 (日曜火) 日二月二十年六十和昭 (行發日一月二十)》《刊夕「静岡新聞」》

《第二号 聞新岡静 (日曜火) (頁八刊夕朝日本) 日二月二十年六十和昭》《静岡新聞》

《第三号 聞新岡静 (日曜水) (頁八刊夕朝日本) 日三月二十年六十和昭》《静岡新聞》

《第三号 聞新岡静 (日曜水) 日三月二十年六十和昭 (行發日二月二十)》《刊夕「静岡新聞」》

《第四号 聞新岡静 (日曜木) 日四月二十年六十和昭 (行發日三月二十)》《刊夕「静岡新聞」》

《第四号 聞新岡静 (日曜木) 日四月二十年六十和昭》《静岡新聞》

《第五号 聞新岡静 (日曜金) 日五月二十年六十和昭 (行發日四月二十)》《刊夕「静岡新聞」》

《第五号 聞新岡静 (日曜金) 日五月二十年六十和昭》《静岡新聞》

『静岡新聞』は創刊当日の 1941 年=昭和 16 年 12 月 1 日付は朝刊しか発行されなかったが、その日の夕刻には第 2 号として 2 日付の夕刊が発行されていることがお分かりであろうか。ついで、翌 12 月 2 日付の第 2 号の朝刊が発行されている。

ところが第 3 号 3 日付は、同じ号数の朝刊のあとに夕刊が綴じられている。

第 4 号 4 日付は夕刊が先にあり、第 5 号 5 日付も夕刊が先に綴じられている。

朝夕刊のどちらが先の発行されたのだろうか。

答えは、ハシラ部分の右端、題字《夕刊》のすぐ上を見ればいい。

12 月 2 日付夕刊は 12 月 1 日に発行、3 日付夕刊は 2 日に発行、4 日付夕刊は 3 日に発行と書かれている。当時の夕刊は翌日付で発行されており、夕朝刊がセットの同一号数だったのである。

『静岡新聞・プリント製本版』の製作工程についてはつまびらかにしないが、製本の段階

で職人さんが、当時の新聞も今日のような朝夕刊セットで発行されたものと勘違いして並

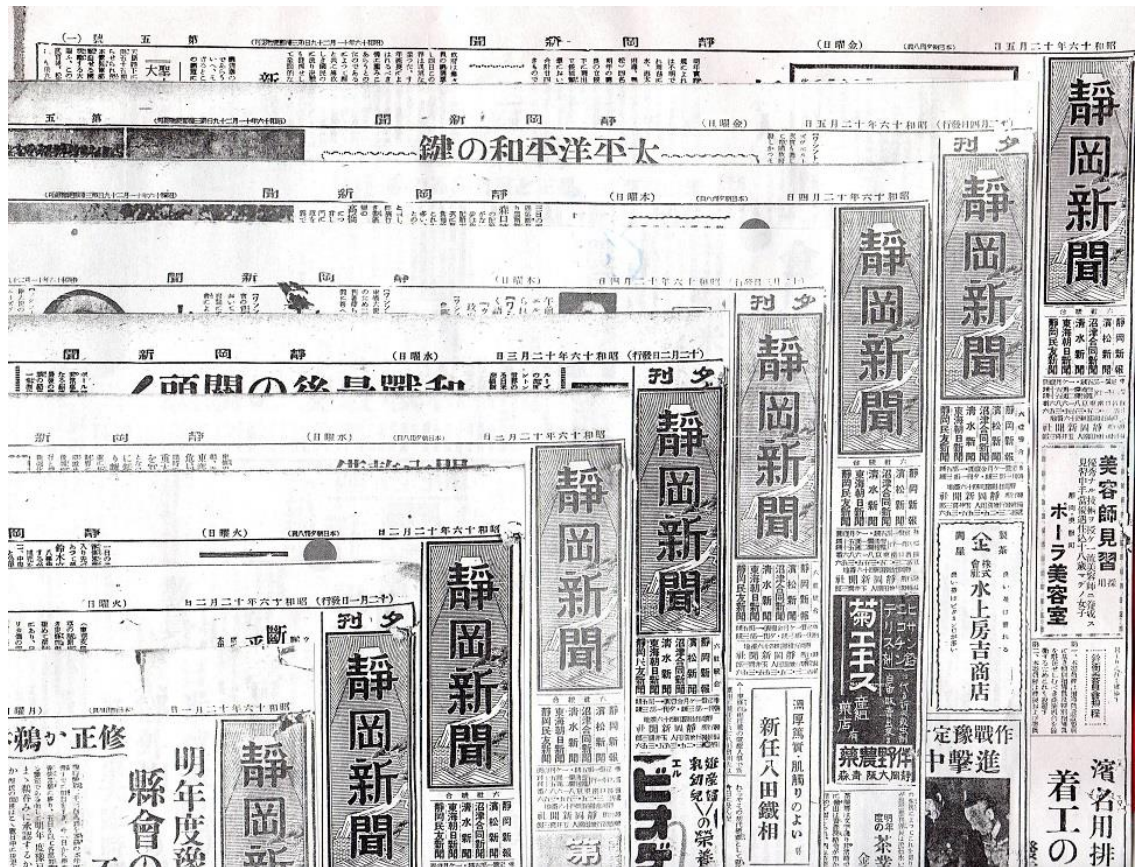


図3-1 『静岡新聞』創刊当初の題字とハシラ

べようとして混乱したのではないかと推量するばかりである。

歴史的な事件・事故を調べていくとき、夕刊→朝刊であろうが、朝刊→夕刊であろうが、ほとんどのばあい単発記事であるから、日付がはっきりしていて、夕刊なら夕刊、朝刊なら朝刊の区別が分かっているれば出典として問題は発生しない。しかし発行順を間違えたまま記事を読んでいくとストーリーが前後して意味不明になってしまうことが起こりうる。

例えば時制が飛んでこれは戦後の『静岡新聞』の話になるが、次のような殺人事件が発生している。

「吉原に惨劇 市議員殺さる 短刀で刺し怪漢逃走」（昭和 25 年 2 月 10 日付朝刊）

「覆面強盗、市議を殺す 物盗りか、けさ吉原市の兇行」（昭和 25 年 2 月 10 日付夕刊）

「手がかりなき犯行 強盗、怨恨の両説が対立」（昭和 25 年 2 月 11 日付朝刊）

「吉原の市議殺し 押入から十万円現わる」（昭和 25 年 2 月 11 日付夕刊）

2 月 10 日付夕刊は《けさ吉原市の凶行》と見出しでうたい、本文は《九日午前二時ごろ吉原市上和田町……に強盗が侵入》という書き出しなので、この夕刊は 9 日の夕方に発行されていないとおかしい。

11 日付記事も、「押入から十万円」が先でないと「怨恨の両説」が生まれないことになって筋書きが成り立たないことになる。

まあ、希なケースではあるが、夕朝刊を発行順に読んでいかないと論理的に筋が通らないという事態が起こりうる。

2 『静岡新聞』題字の変更

せっかくだからもうちょっと続けて、ハシラの部分を見ておこう（図3-2）。

《號九第 聞新岡静（日曜火）日九月二十年六十和昭（行發日八月二十）》《刊夕「静岡新聞」》

ハシラ不明A 手書きで《S.16.12.10 朝（一）》とあり、題字の下端以下の右端のみ残る

《號十第 聞新岡静（日曜水）日十月二十年六十和昭（行發日九月二十）》《刊夕「静岡新聞」》

《號十第 聞新岡静（日曜木）日十月二十年六十和昭》《静岡新聞》

第1面は題字の右半分とそれ以下の右端のみ残る。見えているハシラ部分は10日付の第3面。10日付の原紙は、誰かが破り取ったものと推量される。

《（三）號十第 聞新岡静（日曜水）日十月二十年六十和昭》これは10日付朝刊の第3面
《號一十第 聞新岡静（日曜木）日一十月二十年六十和昭（行發日十月二十）》《刊夕「静岡新聞」》

《號一十第 聞新岡静（日曜木）（頁八刊夕朝日本）日一十月二十年六十和昭》《静岡新聞》

『静岡新聞・プリント製本版』の夕朝刊の並べ方は不規則な乱丁が続いていることはご覧の通りだが、『静岡新聞』という題字の書体が変更されていることにお気づきだろうか。

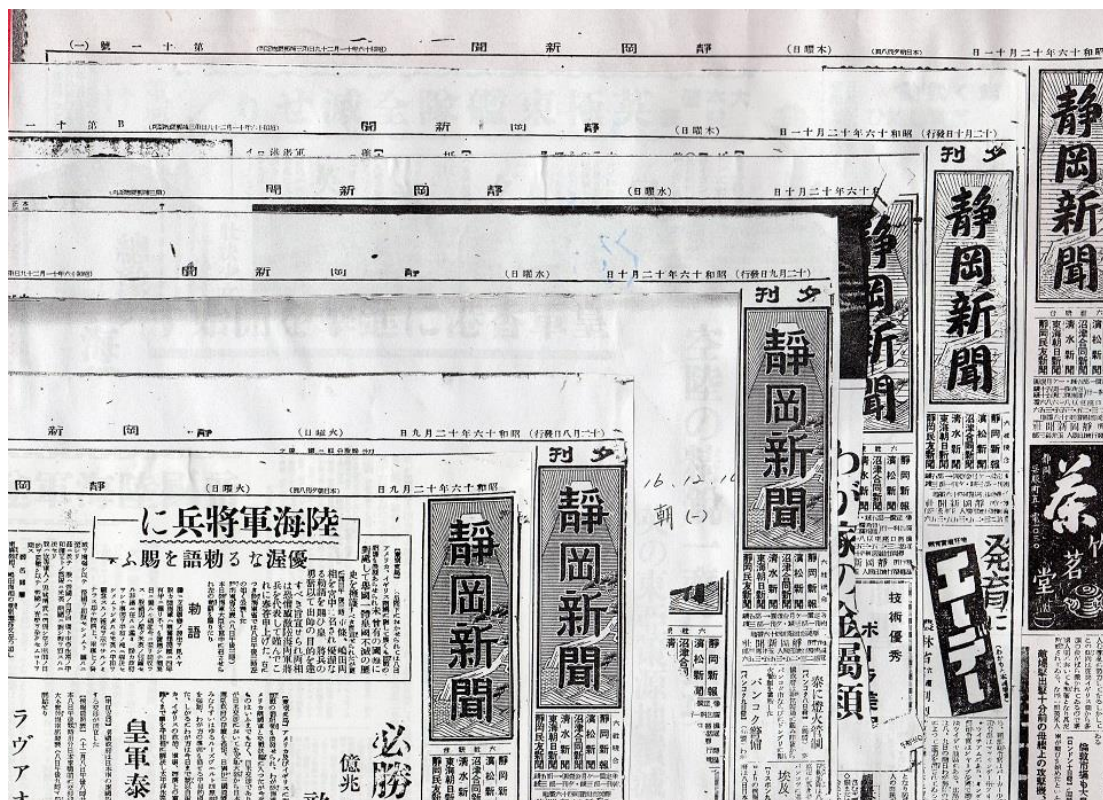


図3-2 『静岡新聞』創刊当初の題字とハシラ（つづき）

12月9日付夕刊と10日付夕刊は角張ったゴシック体で「静」の旁が正字体「争」であるが、つづく11日付夕刊以降の題字は肉太の教科書体に近い「争」になっている。

問題はいつ変更になったかであるが、肝心の10日付朝刊が残っていない。ただし右端だけは残っている紙面が手がかりになりそうだ。

ハシラ不明Aに《S.16.12.10 朝(一)》と書いたのは誰か知らないけれど、12月10日付夕刊の次に綴じてある右端の残片、この記事を読むと同一紙面であることは間違いない。しかも両者ともに12月10日付第1面であると見なしていい。

では破れ残った題字はどうかというと、肉太の教科書体である。12月9日発行12月10日付の夕刊ではなく、10日発行10日付の朝刊から変更になったと考えていいだろう。これが結論である。

3 統合6紙名が消える日

『静岡新聞』が静岡県内の6紙、すなわち『静岡新報』『浜松新聞』『沼津合同新聞』『清水新聞』『東海朝日新聞』『静岡民友新聞』を統合する形で創刊されたことは冒頭で述べた。

そして各紙名が『静岡新聞』の題字下に列記されたことも記しておいた。

しかしそれぞれの歴史をもった各紙名が消える日が来る(図4)。

《號五十八百第 聞新岡静(日曜木) 日四月六年七十和昭》《静岡新聞》《合統社六 静

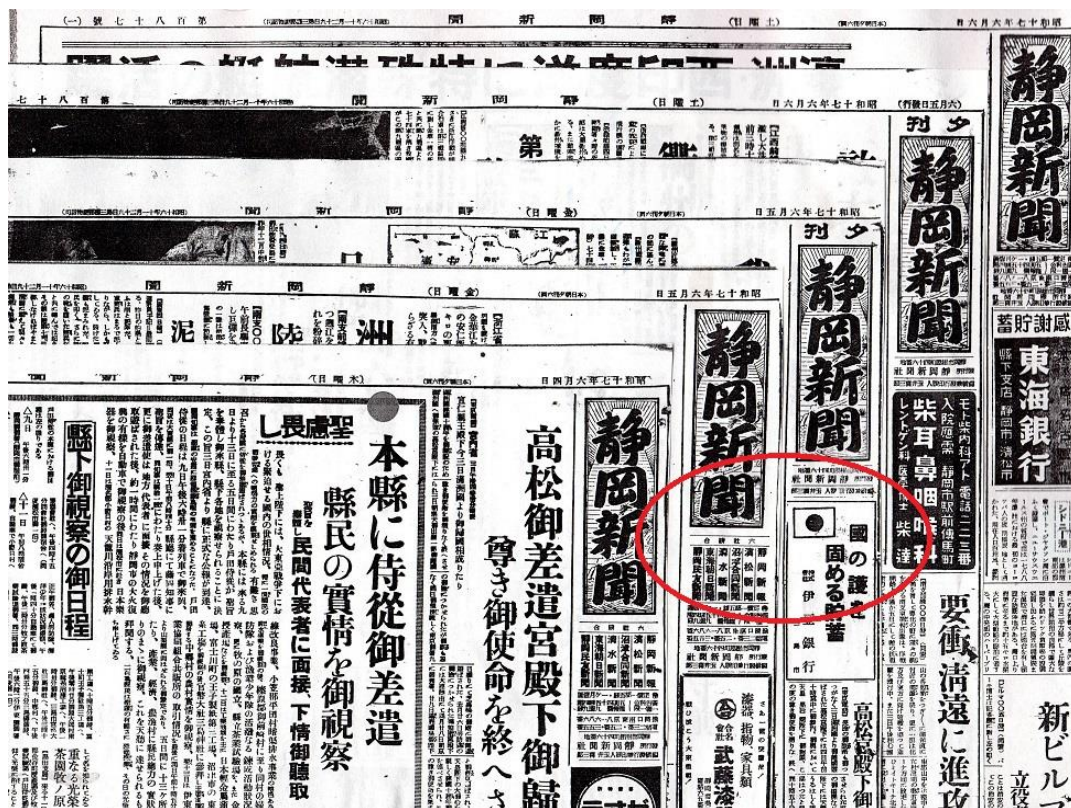


図4 統合6紙名が消える日

岡新報 浜松新聞 沼津合同新聞 清水新聞 東海朝日新聞 静岡民友新聞》
《號六十八百第 聞新岡静（日曜金）日五月六年七十和昭》《静岡新聞》《合統社六 静岡新報 浜松新聞 沼津合同新聞 清水新聞 東海朝日新聞 静岡民友新聞》
《號六十八百第 聞新岡静（日曜金）日五月六年七十和昭》《刊夕 静岡新聞》
《號七十八百第 聞新岡静（日曜土）日六月六年七十和昭（行発日五月六）》《刊夕 静岡新聞》
《號七十八百第 聞新岡静（日曜土）日六月六年七十和昭》《静岡新聞》

『静岡新聞・プリント製本版』（Vol.4）を見る限りでは、昭和17年6月5日付の夕刊が6月4日に発行されたのか5日発行なのかは不明であるが、昭和17年6月5日付をもって統合6社の紙名は消滅していることが分かる。

なぜこの時点で、なぜそういう変更が行われたのか、紙面を見る限りでは不明である。

4『静岡新報』の夕刊発行状況

ここでちょっと脱線する。

『静岡新聞』が1941年＝昭和16年当時、静岡県下で発行されていた『静岡新報』『浜松新聞』『沼津合同新聞』『清水新聞』『東海朝日新聞』『静岡民友新聞』の6紙を統合する形で創刊されたことは先に見てきた。

《統合時、六社を合わせた発行部数は、一万七千四百七十五部。各社別の明細はないが、終戦直後、静岡新聞社が連合軍総司令部に提出した資料によると、その概算は静岡新報六千、静岡民友四千九百、浜松新聞二千、沼津合同二千、清水新聞千五百、東海朝日千部。》（『静岡新聞四十年史』静岡新聞社史編纂委員会編、静岡新聞社発行、昭和56年、46ページ）

という数字があるので、『静岡新聞』は事実上、『静岡新報』『静岡民友新聞』2紙の統合とみていただろう。そこで統合される以前の、両紙の夕刊発行状況をみておこう。さいわい両紙とも歴史文化情報センターには『静岡新聞』と同じようなプリント製本版が蔵架されている。

まずは『静岡新報』の第9065号、大正10年（1921）4月25日付の1面中ほどにつぎような3段抜きの社告が載る（図5）。

《夕刊を発行して 大改良大拡張 本紙六頁となる

国家社会の進運は我が静岡新報を促して茲に紙面の大改良を行はしむると共に夕刊を発行して全紙六頁となすの機会に到達せしめたり、我が社は来る四月廿六日より夕刊（二頁）を東海道沿線各地に配達し一般地方の読者には朝刊と併せて六頁の新聞を提供すべし…

…》そして翌4月26日付3面下のほうに1段でつぎの記事が載る。

《本日より愈 夕刊発行＝宣伝隊全市を練る△

本紙の夕刊は愈今廿六日から発行される、夕刊発行宣伝隊は昨廿五日午後二時半より三台の自動車に分乗して宣伝ビラ及び小旗数万本を満載呉服町三丁目を振出しにビラと小旗を撒布しつゝ呉服町より中町を経て馬場町宮ヶ先に出で片羽材木町を井宮より左曲して安西町を突破し安倍町安西を西端に出で土太夫町に戻り茶町本通より更に研屋町番町本通に出



図5 『静岡新報』の夕刊予告

で新通人宿町両替町等宣伝し七軒町下石町紺屋町呉服町等に出で大なる歓声を浴つゝ更に伝馬町鷹匠町横田横内草深町方面を宣伝し午後五時全市を練り終つて本社前に帰着した》

しかし残念ながら『静岡新報・プリント製本版』（Vol.51）には、4月26日付夕刊も27日付夕刊も収録されていない。初姿が登場するのは4月28日付夕刊である（図6）。

《（一）號六十六千九第（しなみ休中年外の日翌祭大）（日曜火）報新岡静（じつひとのちつ日九十月三旧）日六廿月四年十正大（可認物便郵種三第日七十二月二十年五廿治明）》

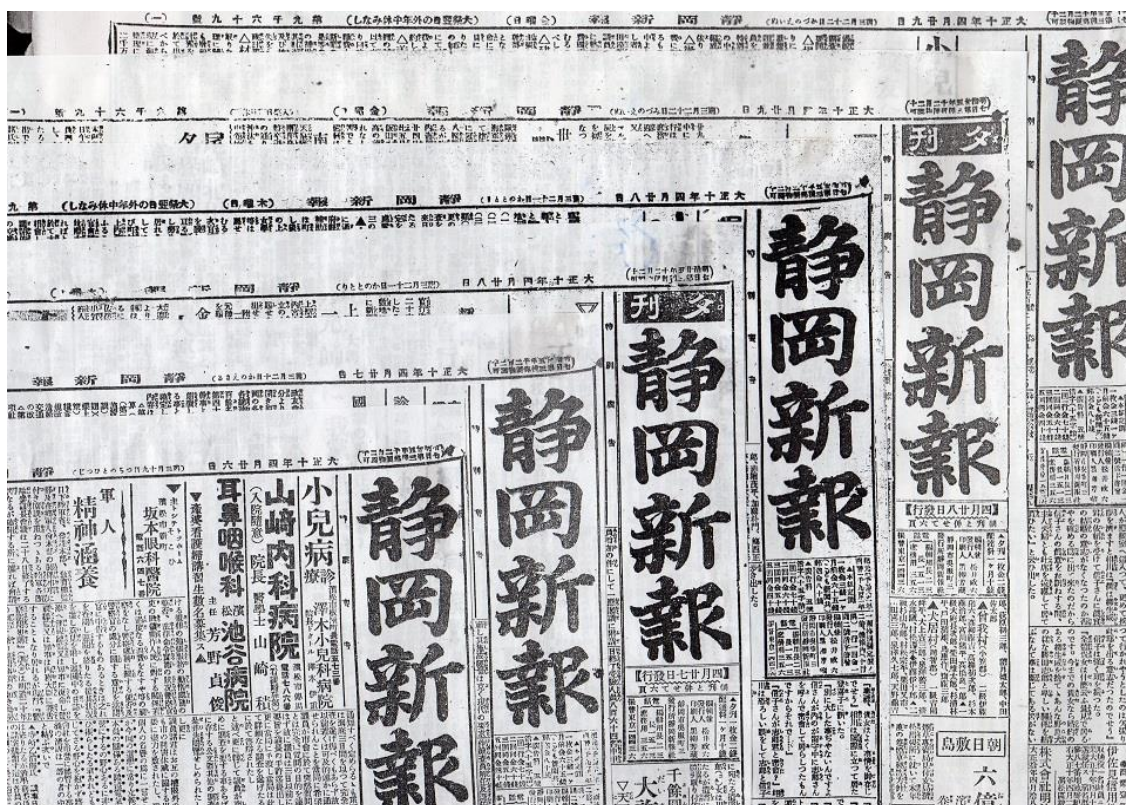


図6 『静岡新報』夕刊発行状況

《静岡新報》〔以下、号数・曜日・日付などに簡略化する〕《號七十六千九第（日曜水）報新岡静 日七廿月四年十正大》《「静岡新報」》
 《號八十六千九第（日曜木）報新岡静 日八廿月四年十正大》《夕刊 静岡新報【行發日七廿月四】》
 《號八十六千九第（日曜木）報新岡静 日八廿月四年十正大》《「静岡新報」》
 《號九十六千九第（日曜金）報新岡静 日九廿月四年十正大》《夕刊 静岡新報【行發日八廿月四】》
 《號九十六千九第（日曜金）報新岡静 日九廿月四年十正大》《「静岡新報」》

ここではちょっと見づらいかもしれないが、《日八廿月四年十正大》の題字《刊夕「静岡新報」》下を見ていただきたい。《【行發日七廿月四】》となっている。《日九廿月四年十正大》の題字下は《【行發日八廿月四】》である。

つまり『静岡新報』第9068号は、4月28日付夕刊が前日の4月27日に発行され28日付朝刊は28日に発行されている。そして当然のことのように、『静岡新報・プリント製本版』では夕刊→朝刊の発行順に綴じられている。

5 『静岡民友新聞』の夕刊発行状況

つぎに『静岡民友新聞』はというと、第11390号、大正15年（1926）6月20日付に4段抜きの社告が載る（図7）。

《本紙の夕刊発行と増頁断行―七月一日から
 本紙は昨年末より本年初頭に亘って社内的一大改革を行ひ新式輪転機の購入新活字の鑄造



図7 『静岡民友新聞』の夕刊を予告する社告

に着手し他面全国地方新聞界に卒先して夜間編輯を開始し着々其効果を収めてゐるが更に引続き愛読者各位の御満足を計る為め来る七月一日から夕刊を發行

夕刊四頁 朝刊六頁

の増頁計劃を斷行することゝし別に七月中旬から新活字を使用することに決定した……》

この社告は、6月21日付、22日付、23日付、24日付、25日付、26日付、27日付、28日付と連日のように載り、6月30日付朝刊には、5段抜きの社告が掲載される(図8)。

そして『静岡民友新聞・プリント製本版』Vol.181の最終ページは6月30日付朝刊であり、『静岡民友新聞・プリント製本版』Vol.182のトップページに7月1日付の夕刊第1号が綴じられている。つまり『静岡民友新聞・プリント製本版』は実際の発行日ではなく、日付で製本してあるので、『静岡民友新聞』第11401号は2冊に泣き別れの悲劇を免れたことになる。

以下『静岡民友新聞・プリント製本版』に綴じ込んである順番どおりに、欄外のハシラ部分と題字を書きだしてみよう(図9-1)〔煩雑なので2行目からは《(可認物便郵種三第日八月三年五廿治明)》と《(刊休無中年)》は省略する〕。

《號百四千一萬一第(可認物便郵種三第日八月三年五廿治明)聞新友民岡静(刊休無中年)(日曜水)日十三月六年五十正大》《岡静 民友新聞》

《號一百四千一萬一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN(日曜木)日一月七年五十正大》《刊タ 岡静 民友新聞》

《號一百四千一萬一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN(日曜木)日一月七年五十正大》《岡静 民友新聞》

《號二百四千一萬一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN(日曜金)日二月七年五十正大》《刊タ 岡静 民友新聞》

《號二百四千一萬一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN(日曜金)日二月七年五十正大》《静岡民友新聞 日二月七》



図8 『静岡民友新聞』夕刊発行当日朝刊の社告

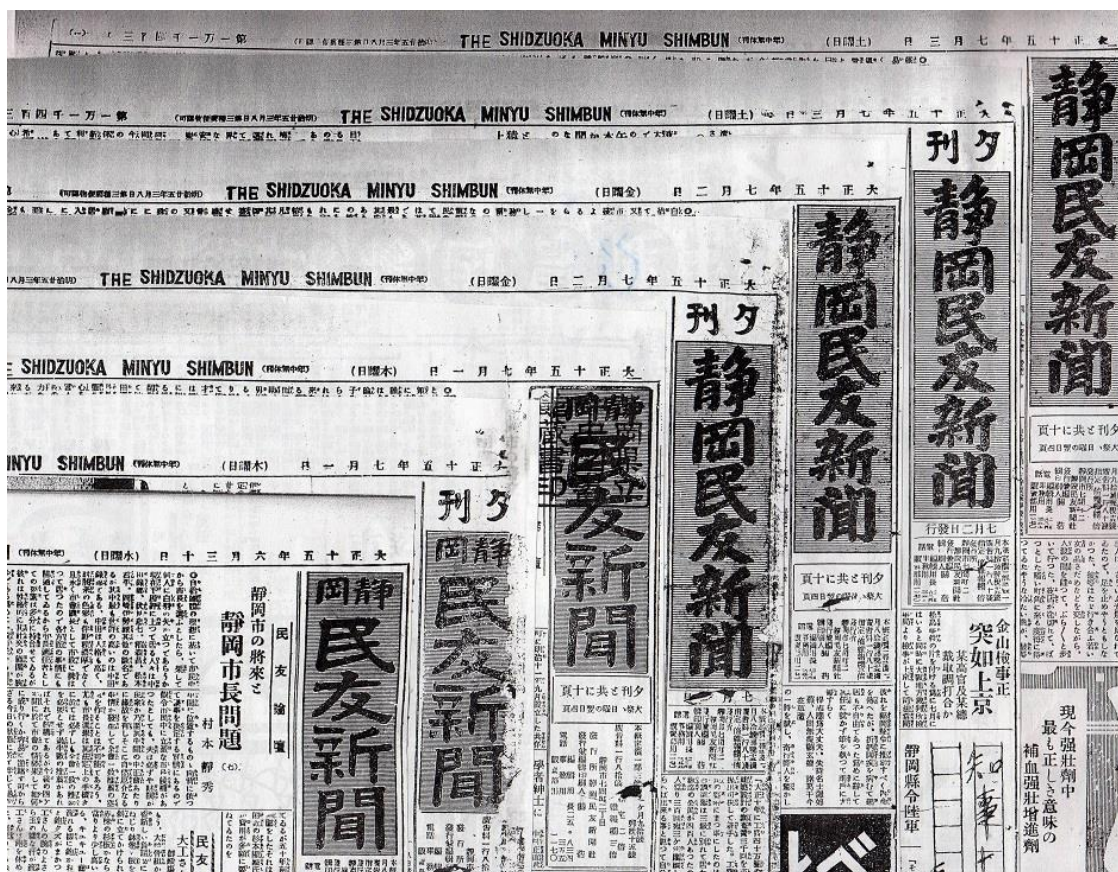


図9-1 『静岡民友新聞』の夕朝刊発行順序と題字の変動

《號三百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜土) 日三月七年五十正大》《刊夕 静岡民友新聞 行發日二月七》

《號三百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜土) 日三月七年五十正大》《静岡民友新聞》

ここで7月2日付夕刊では紙面が汚れて見えにくい、3日付夕刊の題字下を見ていただきたい。《行發日二月七》と書かれていることにお気づきだろうか。

『静岡民友新聞』の夕刊も『静岡新報』と同じように、翌日付で前日発行されたこと、夕刊+朝刊が同じ号数のセットであったことが分かる。『静岡民友新聞・プリント製本版』も発行順に綴じ込んで製本してある。

なおこの間、新聞の題字がくるくる変遷していることを付け加えておこう (図9-2)。

《號九百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜金) 日九月七年五十正大》《刊夕 静岡民友新聞 行發日八月七》

《號九百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜金) 日九月七年五十正大》《静岡民友新聞》

《號十百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜土) 日十月七年五十正大》《岡静 民友新聞 刊夕 行發日九月七》

《號十百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN (日曜土) 日十月七年五十正大》

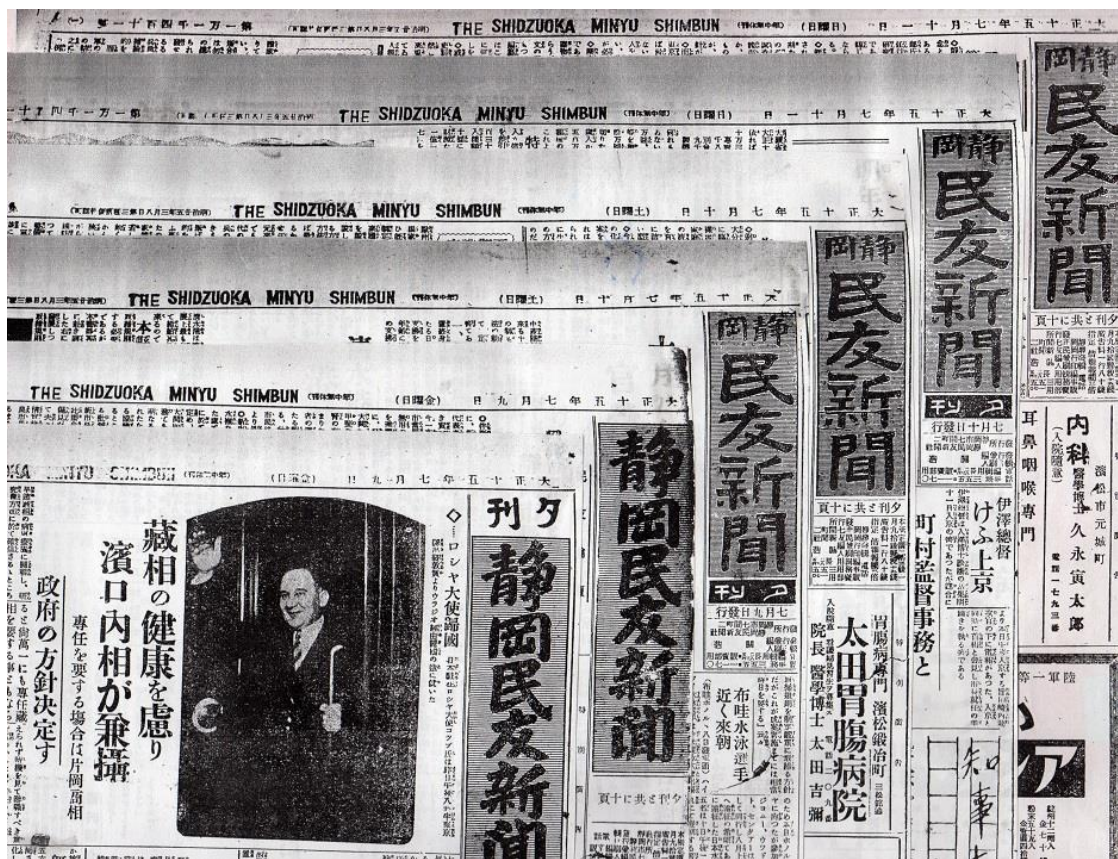


図9-2 『静岡民友新聞』の夕朝刊発行順序と題字の変動

大》

《岡静 民友新聞》《號一十百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN（日曜日）日一十月七年五十正大》《岡静 民友新聞 刊タ 行發日十月七》

《號一十百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN（日曜日）日一十月七年五十正大》《 岡静 民友新聞》

朝刊だけ発行の大正 15 年 6 月 30 日付は、《岡静》が《民友新聞》の上に右横書きで入っており、7 月 1 日付夕刊ではそのさらに上に《刊タ》と右横書きが加えられているが、7 月 2 日付からは《岡静》が縦になって《静岡民友新聞》と変化し、その上に《刊タ》を載せる形に変わり、《刊タ》を取り外せば朝刊の顔になるようになった。

しかしそれは長続きせず、7 月 10 日付夕刊では《岡静》がもとのように右横書きになり、《刊タ》は黒地白抜き文字になって題字の下に移動する。

6 夕刊が当日付になる日、夕刊が廃止となる日

ところがこれまで見てきたような『静岡新聞・プリント製本版』の混乱が解消される日がやってくる。

昭和 18 年 10 月のことである。『静岡新聞・プリント製本版』（Vol.11）から第 1 面欄外のハシラと題字を製本順に書き出すと、つぎのように変化する（図 10）。

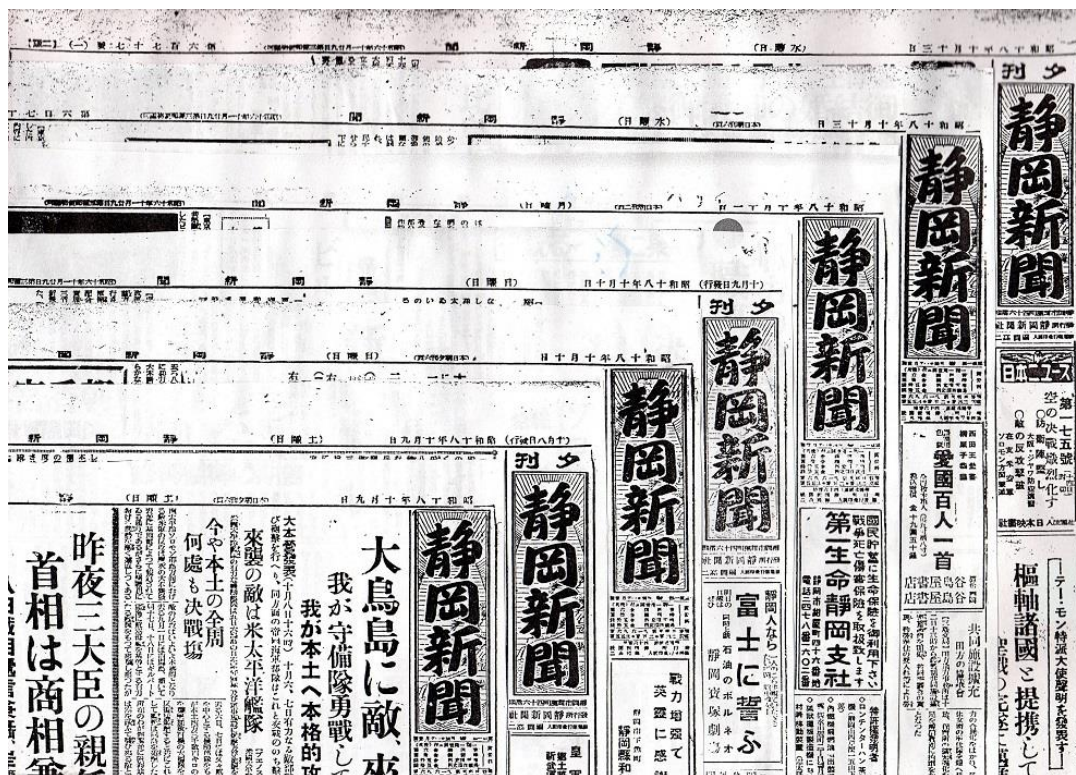


図 10 『静岡新聞』夕刊が当日付になる日

- 《號三十七百六第 聞新岡静（日曜土）日九月十年八十和昭》《静岡新聞》
 《號三十七百六第 聞新岡静（日曜土）日九月十年八十和昭（行發日八月十）》《刊夕 静岡新聞》
 《號四十七百六第 聞新岡静（日曜日）日十月十年八十和昭》《静岡新聞》
 《號四十七百六第 聞新岡静（日曜日）日十月十年八十和昭（行發日九月十）》《刊夕 静岡新聞》
 《號五十七百六第 聞新岡静（日曜月）日一十月十年八十和昭》《静岡新聞》
 《號五十七百六第 聞新岡静（日曜月）日一十月十年八十和昭》《刊夕 静岡新聞》
 [10月12日付朝刊・夕刊とも欠落]
 《號七十七百六第 聞新岡静（日曜水）日三十月十年八十和昭》《静岡新聞》
 《號七十七百六第 聞新岡静（日曜水）日三十月十年八十和昭》《刊夕 静岡新聞》

昭和 18 年 10 月 11 日付をもって、今日のような朝刊→夕刊という同日付の新聞発行に切り替わっていることが分かる。この日以降、『静岡新聞・プリント製本版』は、朝夕刊の乱丁は発生しなくなる。

この変更について『静岡新聞』には社告のようなものは見つからなかったが、今日の『毎日新聞』の前身である『東京日日新聞』も、同じ昭和 18 年 10 月 11 日付をもって、夕刊の発行日と日付を一致させている。

《大正 12 年 9 月 19 日 夕刊発行を始める。ただし日付は翌日朝刊と同じ（昭和 18 年 10 月 11 日から発行日と日付を一致させた）》（『毎日新聞マイクロ版索引』毎日新聞東京本

社編集局情報調査部編、毎日新聞社発行、平成 18 年)

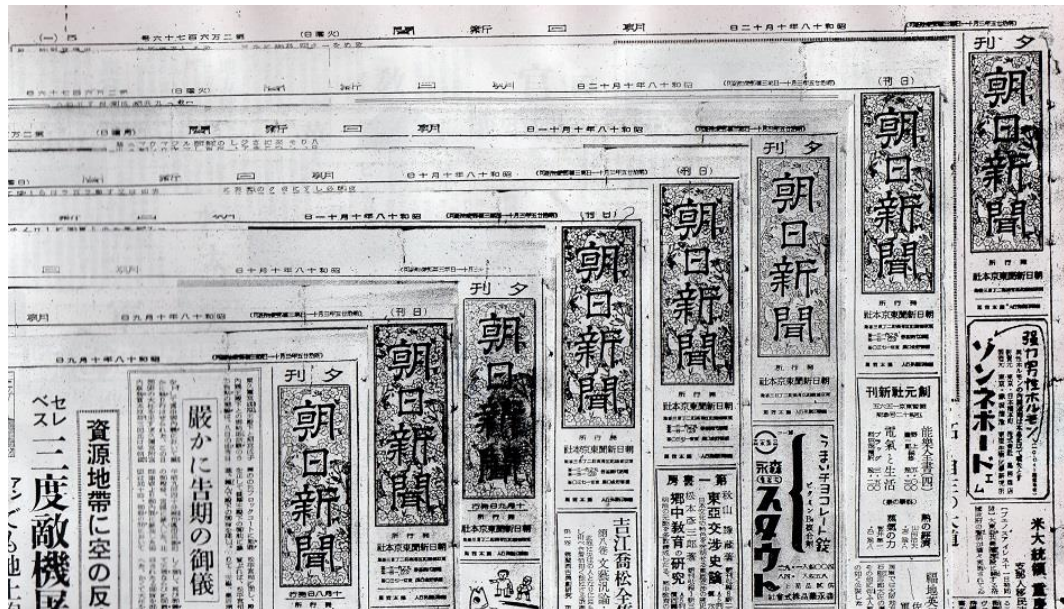


図 11 『朝日新聞』夕刊が当日付になる日

『朝日新聞』のばあいはどうだろう(図 11)。

《号三十七百六万二第(日曜土)聞新日朝 日九月十年八十和昭》《刊夕 朝日新聞 行
發日八月十》

《号三十七百六万二第(日曜土)聞新日朝 日九月十年八十和昭(刊日)》《朝日新聞》

《号四十七百六万二第(日曜日)聞新日朝 日十月十年八十和昭》《刊夕 朝日新聞 行
發日九月十》

《号四十七百六万二第(日曜日)聞新日朝 日十月十年八十和昭(刊日)》《朝日新聞》

《号五十七百六万二第(日曜月)聞新日朝 日一十月十年八十和昭(刊日)》《朝日新聞》

《号五十七百六万二第(日曜月)聞新日朝 日一十月十年八十和昭》《刊夕 朝日新聞》

《号六十七百六万二第(日曜火)聞新日朝 日二十月十年八十和昭(刊日)》《朝日新聞》

《号六十七百六万二第(日曜火)聞新日朝 日二十月十年八十和昭》《刊夕 朝日新聞》

昭和 18 年 10 月 10 日付の夕刊は 9 日夕刻に配達され、10 日は朝刊だけで夕刊はなく、
11 日は夕方になって 11 日付の夕刊が配達されていることが分かる。

朝夕刊セットにしろという「指導」が、内閣情報局あたりからあったのかもしれない。

しかしこういった朝夕刊の発行順序を気にしなくてもいい日が、間もなくやってくる。

昭和 19 年 3 月 6 日には、夕刊が廃止されるのである。

『静岡新聞・プリント製本版』昭和 17 年は 2 か月分ずつ綴じて 6 分冊あるが、昭和 18 年
は 3 か月分ずつで 4 分冊に、19 年は 4 か月分ずつで 3 分冊、20 年にはいると 6 か月分ずつ
まとめて 1 年間がなんと 2 分冊になってしまう。

新聞用紙の供給が戦局とともに減らされ、夕刊の廃止よりはるかまえから朝刊の減ペー
ジがじわりじわりと進んでいたのである。

だから『静岡新聞・プリント製本版』をめくっている限りでは、そもそもその日は夕刊

が発行されなかったから挟み込みがないのか、発行はされたけれど収集されなかっただけなのか、存在しないことを実物で証明してみせることは不可能に近い。

《戦争による用紙不足は深刻であった。創刊から二カ月を経ない昭和十七年一月二十日から、夕刊のうち月、木曜日付の週二日を二ツとし、四月一日からは月、水、金曜日付の週三日が二ツ、次いで五月十七日付からは夕刊は毎日二ツとなった。そしてついに十九年三月六日からは、決戦非常措置要領に即応すべく、日本新聞会の決定に茶づき、全国各紙一斉に夕刊を廃止した。》（『静岡新聞四十年史』静岡新聞社史編纂委員会編、静岡新聞社発行、昭和 56 年、63 ページ）

6 新聞用紙事情の厳しい戦争末期から戦後期

《しかし、用紙事情が、最もきびしかったのは、二十年初めから二十三年末にかけてで、二十年二月の用紙生産量一カ月当たり千三百六十四万ポンドは、十七年時の三割減。さらに同年六、七月の空襲激化で月産量は五百八十万ポンドにまで落ち込んだ。》（同前、76 ページ）

戦後になっても『静岡新聞・プリント製本版』は薄っぺらなままで、昭和 21 年、22 年、23 年、24 年まで各分冊が 6 か月分ずつ綴じてあり、年間 2 冊で済んでしまうのである。

この間『静岡新聞』紙面にちょっとした異変が起こるので、それを紹介しておこう。

昭和 20 年 4 月 20 日付までは題字が『静岡新聞』だったが、翌 4 月 21 日付でとつぜん様変わりする（図 12）。

題字背景の絵柄に変化はないが、題字が『静岡新聞 読賣報知 中部日本新聞 毎日新聞 朝日新聞』の 5 紙列記となる。発行所は静岡新聞社で変わりはない。

このことはこの年 3 月 13 日の定例閣議で決定した「戦局に対処する新聞非常態勢に関する



図 12 5紙合同新聞の発行

る暫定措置要綱》に基づくものである。詳細は省くが、『静岡新聞』昭和 20 年 3 月 14 日付朝刊に「本紙を母体に中央各紙を印刷発行 題名は静岡新聞 中央紙の題号併記」という記事が載っている。

《東京五社、大阪三社、福岡二社は印刷場と差し当り一ヶ所に纏めて共同印刷を行ひ余剰の機械は疎開せしめ有事に備へて予備工場としその必要な機械は鉄資源として供出する》というのである。

しかしそういった必死の努力にもかかわらず、6 月 23 日付はタブロイド判になってしまふ。

ところがなぜか、6 月 24 日付からもとの『静岡新聞』（発行所 静岡新聞社）にもどる。もっともインクに水でも混ぜて印刷したのかどうか、刷りが極めて悪い。

ニッポン敗戦の直前、資材不足の悪条件が 2 カ月で好転したとも思えないのだが、なぜか中央紙統合方針が撤回されたようだ。もっともその経緯と理由について『静岡新聞』紙面からはうかがうことはできなかった。

7 記事見出しが右横書きから左横書きに

これは戦後になってからのことだが、日本の活字文化に画期的な変化が起こる。記事本文は縦組みのままで右行から左行へと読んでいくことに変わりはないのだが、横組みの見出しが左から右へと読むようになった。

昭和 22 年 5 月 1 日付をもって、それまで右横書きの記事見出しがいつせいに左横書きに

切り替えられたのである。欄外のハシラも同じである（図13）。

《號三十六百千一第 聞新岡静 THE SHIZUOKA SHIMBUN（日曜火）日九十二月四年二廿和昭》



図13 右横書きから左横書きへ

《號四十六百千一第 聞新岡静 THE SHIZUOKA SHIMBUN（日曜水）日十三月四年二廿和昭》

《昭和廿二年五月一日（木曜日）THE SHIZUOKA SHIMBUN 第一千九百六十五號》

《昭和廿二年五月二日（木曜日）THE SHIZUOKA SHIMBUN 第一千九百六十六號》

もっともすでに『静岡民友新聞』の夕刊発行のところで見たように、ローマ字だけは左横書きにしてきた新聞の歴史がある。

《號一百四千一万一第 THE SHIDZUOKA MINYU SHIMBUN（日曜木）日一月七年五十正大》《刊夕 岡静 民友新聞》

これを《NUBMIHS UYNIM AKOUZDIHS EHT》などと右横組みに固執することはしなかったが、さすがに大正時代である、日本語部分は右横組みのままの混ぜ書きとなっている。昭和も戦後になってこの呪縛がついに解けたといっている。

先ほどから「右横書き」と言ってきたが、これは正しくないかもしれない。むかしから日本には横書きというものはそもそも存在しなかったというのだ。すべて縦書きである。古い額装された横書きの文字を丁寧に見れば分かる。各文字の最後の一画が、左に流れないで下に向かって流れている。これは縦書きの、1行が1文字詰めの書き方だったと教え

てくれた人がいる。

8 別会社で夕刊の復活

《二十四年春になると王子を中心とした製紙の増産が軌道にのり、各社とも夕刊復活への動きが見え始めた。》（『静岡新聞四十年史』前掲、92 ページ）

ところが、印刷してあれば何でも飛ぶように売れるといわれたこの時期、新聞用紙はGHQの統制下におかれ、朝刊とセットの夕刊の発行は許されなかった。そこで静岡新聞社ではどうしたか。

『静岡新聞・プリント製本版』（Vol.24）をめくっていると、突然「夕刊」という文字が目飛び込んでくる。

昭和 24 年 8 月 14 日付が 2 回あって 8 月 15 日付になる。いやいやそうではない、8 月 14 日付（見本号）というのがある、14 日付と 15 日付の間に挟まっているのだ（図 14）。

記事を読んでもと事件の日付などいかにも本物の新聞である。

ただよくみると、右肩、題字『夕刊新静岡』の上に《（見本號）》と書かれている。左上には《夕刊発行について》と題した、4 段抜きの無署名囲み記事もある（図 15）。

《夕刊発行について……朝刊をみて翌日の朝まで世界と世間の出来事は何も知らされない。かかることは、今日の如く激変する世情において許されることではない。……昨今の各種用紙事情の緩和に鑑み、万難を排して敢然として、夕刊発行の実現に進まんとするものである。》

そして紙面中央にも 3 段抜きで囲み記事がある。

《夕刊新静岡を御愛読下さい 来る九月一日（八月卅一日発行）よりこの見本紙のような“夕刊新静岡”が皆さまの熱烈な御要求に応じて静岡市で発刊致します……“新静岡”株



図14 『夕刊新静岡』(見本号)が挟まっている

式会社》(『夕刊新静岡』昭和24年8月14日(13日発行)見本号)

これはおそらく宣伝用に、朝刊の『静岡新聞』といっしょに配達されたものと思われる。今日の『夕刊フジ』や『日刊ゲンダイ』のような夕刊紙の走りともいえるもので、発行日が翌日付になっていることは引用した社告の通りである。

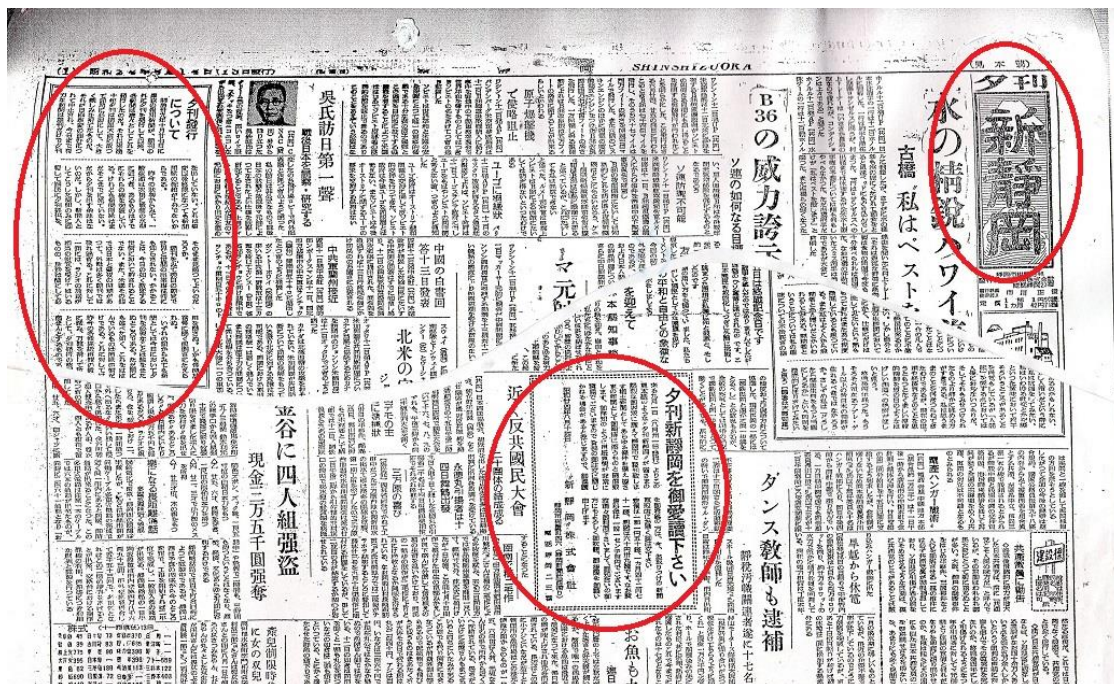


図15 『夕刊新静岡』(見本号)詳細



図 16 『夕刊新静岡』のハシラ

この『夕刊新静岡』は、『静岡新聞・プリント製本版』（Vol.24 昭和 24 年 7 月～昭和 24 年 12 月）には飛び飛びにしか収録されていないので、実態のはっきりしない面もあるがたとえばハシラは次のように長ったらしいものになる（図 16）。

《昭和 24 年 11 月 3 日（11 月 2 日発行）木曜日（昭和 24 年 9 月 15 日第三種郵便物認可）新静岡 THE NEW SHIZUOKA（昭和 24 年 8 月 30 日運輸省特別扱承認第 4 0 0 号）第 64 号》

そして『夕刊新静岡』の題字下に《発行所 新静岡株式会社》とある。号数は新設して若い数字になっているが、所在地は《静岡市紺屋町四十六番地》で静岡新聞社の西隣。静岡新聞社の夕刊復活作戦である。

さらにこの『夕刊新静岡』は昭和 25 年 1 月 1 日付で『夕刊静岡新聞』へと改題する（図 17）。

《「夕刊新静岡」は去る九月一日創刊以来、県下最大の夕刊紙としてその使命を果し県民から好評を博して来ましたが、今回元旦号より「夕刊静岡新聞」と改題、新発足いたします。》（『静岡新聞』昭和 24 年 12 月 31 日付朝刊）》

社告にいう『夕刊静岡新聞』昭和 25 年元旦号というものは『静岡新聞・プリント製本版』



図 17 『夕刊静岡新聞』の予告記事



図 18 『夕刊静岡新聞』の紙面

(Vol.25 昭和 25 年 1 月～昭和 25 年 2 月) には収録されていないが、たとえばハシラは次のようになる (図 18)。

《昭和 25 年 2 月 3 日 土曜日 昭和 24 年 9 月 15 日 第三種郵便物認可 夕刊静岡新聞 (昭和 24 年 8 月 30 日運輸省特別扱承認第 400 号) 第 155 号》

そして『夕刊静岡新聞』の題字下には《2 月 2 日発行 発行所 新静岡株式会社》とある。発行元は変化していない。

『静岡新聞・プリント製本版』の収録が飛び飛びなので出発期日が特定できないのだが、われわれ古新聞閲覧者にとって重要なことが起こっている。夕刊のハシラに《夕刊》という文字が入ったことだ。これまでのハシラでは朝夕刊の区別が分からないので、コピーを撮ったらその場で、その日付の新聞の第 1 面までめくって、題字を見て、朝夕刊を判別して、コピーに書き込まなくてはならなかった。その手間が不要になったのである。

9 夕刊は当日付の朝夕刊セットに、ハシラに「夕刊」の表記

さていよいよ今日の新聞スタイルに近づくことになる。

さらに翌昭和 25 年 12 月 24 日付、題字にちょっとした異変が起きる。それまで題字の枠内にあった《夕刊》が枠の上に飛び出すのである (図 19)。

《昭和 25 年 12 月 13 日 水曜日 夕刊静岡新聞 第 468 号》《「夕刊静岡新聞」12 月 12 日発行》

《静岡新聞 昭和 25 年 12 月 14 日 木曜日 第 3281 号》《静岡新聞》

《昭和 25 年 12 月 14 日 木曜日 夕刊静岡新聞 第 469 号》《刊夕「静岡新聞」12 月 12 日発行》

《静岡新聞 昭和 25 年 12 月 15 日 金曜日 第 3282 号》《静岡新聞》

《昭和 25 年 12 月 15 日 金曜日 夕刊静岡新聞 第 469 号》《夕刊「静岡新聞」12 月

14 日発行》



図 19 《夕刊》が題字枠の外に飛び出す

『静岡新聞』創刊当初、昭和 16 年 12 月 2 日付夕刊と同じスタイルに戻ったといえよう（図 2 参照）。これが何を意味するのか、紙面からうかがい知ることにはできないが、『静岡新聞』創刊当初のスタイルにそっくりに回帰していることにお気づきであろうか。題字の《静岡新聞》の書体がちょっと違うだけで元の版を使っていないことも分かる。

そしてまた、この年の 10 月初めにまたちょっとした異変が起こる。欄外のハシラと題字下の記述を追ってみよう（図 20-1）。

《静岡新聞 昭和 26 年 10 月 1 日 第 3 5 7 1 号 日刊》《静岡新聞 発行所 静岡新聞社》

《昭和 26 年 10 月 1 日 夕刊静岡新聞 第 7 5 9 号》《夕刊『静岡新聞』9 月 30 日発行 発行所 新静岡株式会社》

《静岡新聞 昭和 26 年 10 月 2 日 第 3 5 7 2 号 日刊》《静岡新聞 発行所 静岡新聞社》

《昭和 26 年 10 月 2 日 夕刊静岡新聞 第 7 6 1 号》《夕刊『静岡新聞』10 月 2 日発行 発行所 新静岡株式会社》

《静岡新聞 昭和 26 年 10 月 3 日 第 3 5 7 3 号 日刊》《静岡新聞 発行所 静岡新聞社》

《昭和 26 年 10 月 3 日 夕刊静岡新聞 第 7 6 2 号》《夕刊『静岡新聞』10 月 3 日発行 発行所 新静岡株式会社》

つまり昭和 26 年 10 月 2 日付で、夕刊『静岡新聞』はふたたび日付と発行日が同日とな

り、朝刊『静岡新聞』→夕刊『静岡新聞』という今日の朝夕刊セット版のスタイルになったことになる。

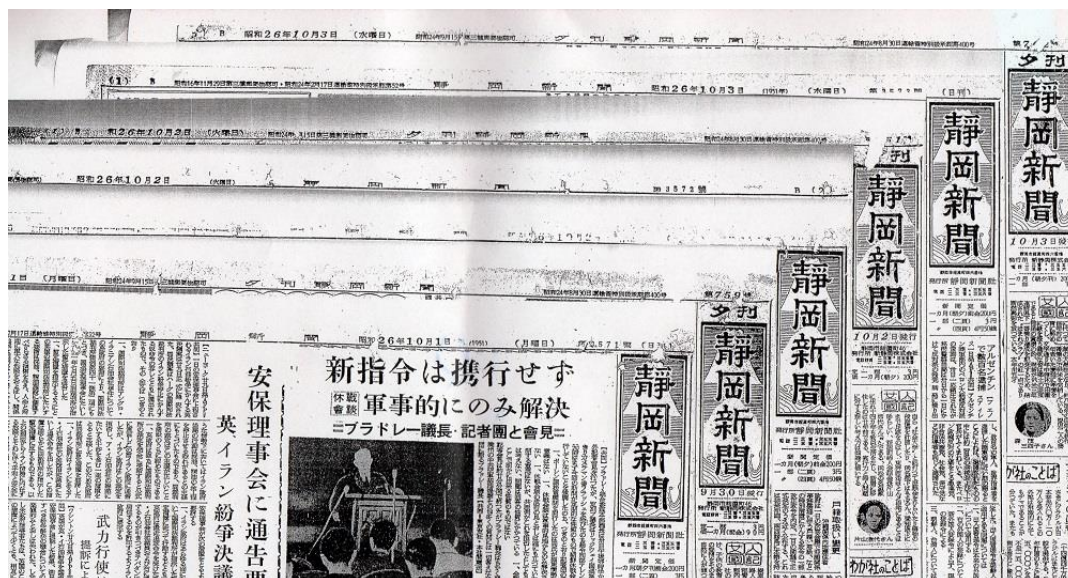


図 20-1 『静岡新聞』と『夕刊静岡新聞』、日付と発行日が同日になる

『静岡新聞・プリント製本版』ももはや朝夕刊の発行順を入れ間違えて製本することはなくなる。

ちなみに『静岡新聞・プリント製本版』には、夕刊『静岡新聞』の第760号は収録されていない。第760号は発行されなかったものと考えるのが妥当であろう。

そしてこの退屈なりポートは間もなく終末を迎えることになる。

あと数日、両紙のハシラを見ていくことにしよう(図 20-2)。

《昭和 26 年 10 月 9 日 夕刊静岡新聞 第 7 6 8 号》《夕刊『静岡新聞』10 月 9 日発行 発行所 新静岡株式会社》

《静岡新聞 昭和 26 年 10 月 10 日 第 3 5 8 0 号》《発行所 静岡新聞社》

《昭和 26 年 10 月 10 日 静岡新聞夕刊 第 3 5 8 0 号》《『静岡新聞』夕刊 10 月 10 日発行 発行所 静岡新聞社》

《静岡新聞 昭和 26 年 10 月 11 日 第 3 5 8 1 号》《発行所 静岡新聞社》

ついに、1 9 5 1 = 昭和 26 年 10 月 10 日付でもって朝夕刊が同じ号数になり、《夕刊》



図 20-2 静岡新聞社と新静岡株式会社が統合一本化された日

の文字が題字『静岡新聞』下に移され、ハシラの《夕刊静岡新聞》は《静岡新聞夕刊》に変更、『夕刊静岡新聞』名と新静岡株式会社は消えた。

ここにめでたく静岡新聞社と新静岡株式会社は統合されて静岡新聞社に一本化された。静岡県の新聞戦時体制がようやく終わったのである。

なお、『静岡新聞四十年史』には、『新静岡株式会社は……二十六年七月一日、静岡新聞社に併合、夕刊を本社発行に移した』とあるが（94 ページ）、『静岡新聞・プリント製本版』に綴じてある紙面からは確認できなかった。また、『夕刊の日付が翌日付から当日付に変わった』のは昭和 26 年 10 月 10 日だと読めるが（同前）、以上見たように夕刊が当日付になったのは同年 10 月 2 日であり、夕刊を本社発行に移管したのは 10 月 10 日である。

このレポートをまとめるに当たって、静岡県立中央図書館歴史文化情報センター職員の方々には、繰り返し繰り返ししつこく行われる資料請求にこころよく耐え抜いていただいた。ありがとうございました。